

芥川龍之介

或旧友へ送る手記



或旧友へ送る手記

誰もまだ自殺者自身の心理をありのままに書いたものはない。それは自殺者の自尊心や或は彼自身に対する心理的興味の不足によるものである。僕は君に送る最後の手紙の中に、はっきりこの心理を伝えたいと思っている。尤も僕の自殺する動機は特に君に伝えずとも善い。レニエは彼の短編の中に或自殺者を描いている。この短篇の主人公は何の為に自殺するかを彼自身も知っていない。君は新聞の三面記事などに生活難とか、病苦とか、

或は又精神的苦痛とか、いろいろの自殺の動機を発見するであろう。しかし僕の経験によれば、それは動機の全部ではない。のみならず大抵は動機に至る道程を示しているだけである。自殺者は大抵レニエの描いたように何の為に自殺するかを知らないであろう。それは我々の行為するように複雑な動機を含んでいる。が、少くとも僕の場合は唯ぼんやりした不安である。何か僕の将来に対する唯ぼんやりした不安である。君は或は僕の言葉を信用することは出来ないであろう。しかし十年間の僕の経験は僕に近い人々の僕に近い境遇にいない限り、僕の言

葉は風の中の歌のように消えることを教えている。従って僕は君を咎め^{とが}ない。……

僕はこの二年ばかりの間は死ぬことばかり考えつづけた。僕のしみじみした心もちになってマインレンデルを読んだのもこの間である。

マインレンデルは抽象的な言葉に巧みに死に向う道程を描いているのに違いない。が、僕はもっと具体的に同じことを描きたいと思っている。家族たちに対する同情などはこう云う欲望の前には何でもない。これも亦君には、Inhuman の言葉を与えずには措^おかないであろう。け

れども若し非人間的とすれば、僕は一面には非人間的である。

僕は何ごとも正直に書かなければならぬ義務を持つて
いる。（僕は僕の将来に対するぼんやりした不安も解剖
した。それは僕の「阿呆の一生」の中に大体は尽してい
るつもりである。唯僕に対する社会的条件、——僕の上
に影を投げた封建時代のことだけは故意にその中にも書
かなかつた。なぜ又故意に書かなかつたと言えば、我々
人間は今日でも多少は封建時代の影の中にいるからであ
る。僕はそこにある舞台の外に背景や照明や登場人物の

——大抵は僕の所作しよさを書こうとした。のみならず社会的条件などはその社会的条件の中にいる僕自身に判然とわかるかどうかとも疑われない訣には行かないであろう。) ——僕の第一に考えたことはどうすれば苦まらずに死ぬかと云うことだった。縊死いしは勿論この目的に最も合する手段である。が、僕は僕自身の縊死している姿を想像し、贅沢にも美的嫌悪を感じた。(僕は或女人を愛した時もある。) 溺死も亦水泳の出来る僕には到底目的を達する筈はない。のみならず万一成就するとしても縊死よりも

苦痛は多いわけである。 轢死れきしも僕には何よりも先に美的嫌悪を与えずにはいかなかった。ピストルやナイフを用うる死は僕の手の震える為に失敗する可能性を持つている。ビルディングの上から飛び下りるのもやはり見苦しいのに相違ない。僕はこれ等の事情により、薬品を用いて死ぬことにした。薬品を用いて死ぬことは縊死することよりも苦しいであろう。しかし縊死することよりも美的嫌悪を与えない外に蘇生する危険のない利益を持っている。唯この薬品を求めるとは勿論僕には容易ではない。僕は内心自殺することに定め、あらゆる機会を利用

してこの薬品を手に入れようとした。同時に又毒物学の知識を得ようとした。

それから僕の考えたのは僕の自殺する場所である。僕の家族たちは僕の死後には僕の遺産に手たよらなければならぬ。僕の遺産は百坪の土地と僕の家と僕の著作権と僕の貯金二千円のあるだけである。僕は僕の自殺した為に僕の家売れないことを苦にした。従って別荘の一つもあるブルジョアたちに羨ましさを感じた。君はこう云う僕の言葉に或可笑しさを感じるであろう。僕も亦今は僕自身の言葉に或可笑しさを感じている。が、このことを

考えた時には事実上しみじみ不便を感じた。この不便は到底避けるわけには行かない。僕は唯家族たちの外に来るだけ死体を見られないように自殺したいと思っている。

しかし僕は手段を定めた後も半ばは生に執着していた。従って死に飛び入る為のスプリング・ボオドを必要とした。(僕は紅毛人たちの信ずるように自殺することを罪悪とは思っていない。仏陀は現に阿含経の中に彼の弟子の自殺を肯定している。曲学阿世の徒はこの肯定にも「やむを得ない」場合の外はなどと言うであろう。し

かし第三者の目から見て「やむを得ない」場合と云うのは見す見すより悲惨に死ななければならぬ非常の変の時にあるものではない。誰でも皆自殺するのは彼自身に「やむを得ない場合」だけに行うのである。その前に敢然と自殺するものは寧ろ勇氣に富んでいなければならぬ。）このスプリング・ボオドの役に立つものは何と云っても女人である。クライストは彼の自殺する前に度たび彼の友だちに（男の）途づれになることを勧誘した。又ラシイヌもモリエールやボアロオと一しよにセエヌ河に投身しようとしている。しかし僕は不幸にもこう云う友だち

を持っていない。唯僕の知っている女人は僕と一しよに死のうとした。が、それは僕等の為には出来ない相談になつてしまった。そのうちに僕はスプリング・ボオドなしに死に得る自信を生じた。それは誰も一しよに死ぬものがないことに絶望した為に起つた為ではない。寧ろ次第に感傷的になつた僕はたとい死別するにもしろ、僕の妻を^{いたわ}劬りたいたいと思つたからである。同時に又僕一人自殺することは二人一しよに自殺するよりも容易であることを知つたからである。そこには又僕の自殺する時を自由に選ぶことの出来ると云う便宜もあつたのに違いない。

最後に僕の工夫したのは家族たちに気づかれないうちに巧みに自殺することである。これは数箇月準備した後、兎に角或自信に到達した。(それ等の細部に亘ることは僕に好意を持っている人々の為に書くわけには行かない。尤もここに書いたにしろ、法律上の自殺幫助罪ほうじよへこのくらい滑稽な罪名はない。若しこの法律を適用すれば、どの位犯罪人の数を殖やすことであろう。薬局や銃砲店や剃刀屋かみそりはたとい「知らない」と言ったにもせよ、我々人間の言葉や表情に我々の意志の現れる限り、多少の嫌疑を受けなければならぬ。のみならず社会や法律はそれ

等自身自殺幫助罪を構成している。最後にこの犯罪人たちは大抵は如何にももの優しい心臓を持っていることであろう。》を構成しないことは確かである。僕は冷やかにこの準備を終り、今は唯死と遊んでいる。この先の僕の心もちは大抵マインレンデルの言葉に近いであろう。

我々人間は人間獣である為に動物的に死を怖れている。所謂生活力と云うものは実は動物力の異名に過ぎない。僕も亦人間獣の一匹である。しかし食色にも倦いた所を見ると、次第に動物力を失っているのである。僕の今住んでいるのは氷のように透^すみ渡った、病的な神経

の世界である。僕はゆうべ或売笑婦と一しよに彼女の賃金（！）の話をし、しみじみ「生きる為に生きている」我々人間の哀れさを感じた。若しみずから甘んじて永久の眠りにはいることが出来れば、我々自身の為に幸福でないまでも平和であるには違いない。しかし僕のいつ敢然と自殺出来るかは疑問である。唯自然はこう云う僕にはいつもよりも一層美しい。君は自然の美しいのを愛し、しかも自殺しようとする僕の矛盾を笑うであろう。けれども自然の美しいのは僕の末期まっごの目に映るからである。僕は他人よりも見、愛し、且又理解した。それだけは苦

しみを重ねた中にも多少僕には満足である。どうかこの手紙は僕の死後にも何年かは公表せずつに措おいてくれ給え。僕は或は病死のように自殺しないと限らないのである。

附記。僕はエムペドクレスの伝を読み、みずから神としたい欲望の如何に古いものかを感じた。僕の手記は意識している限り、みずから神としないものである。いや、みずから大凡下だいほんげの一人としているものである。君はあの菩提樹の下に「エトナのエムペドクレス」を論じ合つた二十年前を覚えているであろう。

僕はその時代にはみずから神にしたい一人だった。

（昭和二年七月）

日本文学電子図書館

或旧友へ送る手記

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

底 本：「文芸的な余りに文芸的な」
岩波書店

昭和6年7月1日印刷

昭和6年7月5日第1刷発行



日本文学電子図書館